





利
1077
48



紅葉賀

十七歲

神皇月十餘日朱薙院行幸事

先於内裏有試樂事

源氏中將同以中將兼左海波

右金女御与源氏贈答事

行幸其夜兼賞源氏叙正三位

从中将叙正四位事

源氏右左金女御三条文對面等事

宮事

十二月廿日紫姬君除服事

九月廿日外祖
母尼君卒去

十二月廿日三ヶ月
脹満在之

十八歳

正月一日参朝御事

紫衣君此々参遊事

正月二日系願處給事

内春宮一院三系
宮未也此一説

為古来
不審

二月十余日夜重女御以産 男子事

冷泉院
是也

去年四月菟重里居此与源氏有密
通事則懐妊乃有ありと建り
あつて乃二月廿七日十月月之末り
と源中秘抄に横置乃年紀と云
とて冷泉院ハ三年胎内と云
中すと思ふに羅睺産者者六子耶
輸多羅乃胎と云一事と例り出
たりと云ふ何やまはるし

源氏送消息公主命婦許事

四月若宮初系内事 若宮似源氏給事

源氏抄按子送王命婦許事

策君習筆給事

友比源氏与源内侍戲事

又源内侍於温明殿彈琵琶事

源氏秋东屋立寄給事

从中将足羽川解直衣寄事

此時源内侍又十七八乃人之二十也

有人云以中物云云——但源氏若

即——云云云云云云云云云云云云

一源氏云云云云云云云云云云云云

十月若宮女御立名事

源氏任宰相兼中将事

中宮入内源氏供奉事

お系が笑

箋曰詞心めて付らる巻名也

箋

ひ巻は紅葉がははるさうら詞をく末ノ

巻 **花鳥** 巻 **紅葉** 末ノ **秋** してひ時ノ

とお系乃笑とそり **花** 一説よりみらる乃

うけやゆりくー **明**んと云ふと **笑**也日

やとくさうら **花**ありとて **箋**曰巻の

名は符合うー **人**とあり **凡**笑と云ふ

年 **此** **馬** **鞍** **と** **笑** **し** **て** **新** **末** **此** **寶** **篋**

といふふゆ

說文云 賀 以禮物相奉慶也

賀と号する先例

死

弘明天皇 乙未 祚泉小 弘明天皇

乃文小 友 弘明天皇

乃文小 友 弘明天皇

弘明天皇

弘明天皇 弘明天皇

事あり

以上 弘明天皇

弘明天皇 弘明天皇

弘明天皇 弘明天皇

弘明天皇 弘明天皇 弘明天皇

弘明天皇 弘明天皇 弘明天皇

弘明天皇 弘明天皇

弘明天皇 弘明天皇

弘明天皇 弘明天皇

弘明天皇 弘明天皇

弘明天皇 弘明天皇

太上天皇ノ御賀ハ

淳和天皇天長二年十一月申奉賀

太上天皇五八之御齡ニ是始也 秘曰

源氏十七日乃十月より十八日七月

まきの事あり

河内廿十月まきの事ありと云

花女とわくはこゝろ

秘云山上等分注し梨秘は養同

河
朱雀院乃行幸紅葉此陰之賀此字卷

乃中よりんてされとも此宮あきよお系の

所賀とありは名目小秘院あり

或按所祝は巻乃名心あて付ら

一西白一又河内廿十八日

十月まきの事あり七乃字と十

文字小あやまらぬ心外より

朱萑院乃行幸ハ神皇月の十日あり也

義曰三條朱萑ハ四町ハ遠ク北ノ方ニ
侍院ノ天子服從乃此御在所也
延喜此御宇ハ朱萑院ハ多クハ宇多天皇ニ
在リト朱萑院乃女御也命トありト宇
多御門乃西幸ノ位ト云フ所也後此院
ハ西宮あり也

行幸

茶毘云天子車駕所至見令長三老

臣属親臨軒作樂賜以食帛民符有級或賜田租故謂之幸

晋灼曰民臣被其德以為徽倖也

又師古曰幸可慶幸也故福喜之事皆稱為幸

朱萑院行幸之先例

延喜十六年三月七日辛酉行幸朱萑院

有法皇五十御賀

花鳥よみ例くりり

又同年八月十八日行幸朱萑院詩題子風送秋韻

康保二年十月十三日行幸朱萑院題飛葉去舟輕

十月之例康保二年よ相當り

全篇之儀延喜十六年よ隨つきしや

花延喜く月よとありいは卷十一流と

よ事あり寛平法皇よ准と延喜の以

門崩湯乃後よ一洗いれせ如りの

相登の在位の中崩湯乃事んとり也

以上是河花ノ為也

秘

花鳥子種く河内あり宇多内門の内
三ヶ交也朱雀院乃事中人十江より
古今朱雀院乃女郎也合しあり宇
多内門の行幸す河内康保二年十月
といかり時ふくはよりとほく死

昇

宇多内門の事よ此より少花鳥より
但るはれぬ中此の事よふはゆり
垣代早人の教と説く石田之品院此
院といふて朱雀院ハ三条朱雀院あり

朱雀冷泉の事とありぬ此の事
——由す院也

全書

圖書曰代りありぬ此の事と朱雀院
ありありけりて兼平乃分と云朱雀院
とありありてありけり兼平此
内門の延在り後乃事ありけり兼平
乃時ふくはよりとありけり
行幸す天子車駕してありあり
氏は物ありありありありありあり

九
林
賀
始
之
己
ト
と
と
河

升をこしつゝのこ

河海裏書云

知見抄云

春文乃御前の賀より一いつき
とつり是の非人此西賀とや賀と
つたり半とつり春文の陽成天皇の御
母女御の二条此名之甚古西賀之賀と
凡年乃十ニモ古ニモ世ニモ必ツモ凡年西賀
遊ラセり之ゆゑく大なり此の賀
十年一交河の世河之喜とつり

乃賀とつり此とつり此賀とつり
それありぬ西遊とつり此の賀月の賀と
つり一賀とつり此

此云以上作此西遊賀とつり不富つり

よのつ孫ありにあり一ろろ人さるむいれ
かりとつれ

今度乃御賀のつり此はくろつり
小尋常ありに面白く人より
とつり大

此のく物ん始らぬ事瓜

禁中乃外あれは女御そのの内見物

叶いなり 箋曰

うと散つがりも始らるん

およ物も始りる事と口かーりとり

を女御より此の是はみよりの内見物

壹乃内見とらん事と口掃く物なり

どりよりさるは心うれかこころなり

何すおほさゆら不足は物のあり

しすむわさるこ

試楽と内中人あり

御賀よ試楽酒系うこつひて舞系れ

のこありけし時の試楽の内裏よりさる

治り散壺此女作らるるもつとせ治り

長海波とまひあひをり

長河 南宮藩云 兼和州大納言良峯

安世兼勅命作け舞時依勅政成盤

涉調 えい平調

舞装束 表袴 文小葵 青色袍

南菊深下籠 面大海浦 裏南菊 大海浦半臂

舞子向一方操寄波川波神へ

くさくさ大殿の政中将

年のあひ子と花鳥よろうりひびき

大長谷の皇孫中将也葵上は兄へ

人よふこころ多し

世上の人よふこころりりりり源氏よ

立ちあひてこころは

花乃くさくさ此こふ木

兼日記とこふ木乃ありての花こひ

まじりとも身しこころ

深山木と面何さゆあり

は政中物とありしあてふあまれと

源よむりましつるそふこふ山木とお

りしあふふあり

くさくさ 中丸 花乃かきりし此常盤木也

よふこころと 仲忠大將氏花

ふとへに孝殿乃女卿の孫正ふとを盤
本よるもくつてふく
或抄むよきらまう〜つらつらと山本入
にり〜るる〜

つらつら此日就きやたにう〜るに

舞よ入日成らんまありあめの京氣
あうと胡乃あ〜りりりてかり〜るく
つらあせり

おと〜ち

而納く〜りら〜世〜ん〜あ〜れは
福〜り〜ん〜あ〜れは

祿〜り〜ん〜あ〜れは

美河青海波の祿小野宮初年
桂殿迎初歳 相樓媚早年
筑紫梅樹下 蝶燕畫梁邊

仏のほ〜り〜びん〜の〜忠

伽陵頻伽

同書云
りまうひん
天上あり
多し人作
おとあふ
これん佛の
うまうひんと

ハ佛国土の
まうひんと
天上あり
多し人作
おとあふ
これん佛の
うまうひんと

美 化城喻品 聖主天中天迦陵頻伽
色衰愍衆生者我等今敬礼 隨喜
功德品 山川險谷中 迦陵頻伽色傘
傘等諸鳥悉聞其音聲

迦陵頻伽 名義集云此云妙色鳥
大論云在殼中未出瓮色微妙勝於諸
鳥 正法念經云妙音色妙音若天若人若
緊那羅等無能及者唯除如來音色
河唐云教鳥此鳥鳴時音中轉苦空在

我常樂我淨也

美 曰佛乃西迦陵頻伽乃妙と云る也
眼と付人——は鳥此鳥小此と人さ物なり
よとて佛乃音聲妙なること之隨在功德品
乃文ハ鳥のしりり之化城喻品乃文聖
主天中天はてあし——くすり仏の滅後此
後ハ如來乃西迦陵頻伽乃人ハ鳥なりと
が明やうもてしと思ひやふと云り深氏乃
善都此と云れらうと云り也

あゝあゝ何しん

秘 友はかたはらの懸よりくわくしん

しんぞうりひし

秘 味さうし

友つかたはるを別してんぞうりひ

はとのちん

りあてをけあういりん

秘 又勅定之段中将をなるとはしん

家乃子いしん

策河 良家此子也

秘 堂上乃軍としん

世継 才七 東三條院中が家人此

子此君達

高松友のいしん 高明し女 八五君 頼宗云

納換利

殿乃人のいしん 倫子雅信云 女いしん君

頼通云 陵王

以上策

若菜乃奏云十月は東菴院の御幸
ありしとて舞人なりし御人なり
家の子とてあり
位あがりかた何れも中とて
名紙えりしひの

舞乃乃此者の事今世も舞人
舞人を通く地下はあり

あしはたぬめのさか
笑 巨くあへ 大庭よりなり

そ通の者の練磨して勿論あはれ
をたふされしとて大やうは風流なり
そり舞の源をのやうかえしひ
さぬてたもあつらひとてえん
とせぬは好情のるれんあへ

あつらひ日くはくつ
試采の日やうにあたりおあされ
舞の日や清白あてとせりんと
ちひけやうくしるん面白き

んせうとまうらん

あつりくみあうとあひんといふ

乃はゆと

うききせひる

これまてみしもの印切

はあて中將の君

^秘 聖朝海より葎童(の清き)

かにゆらん一と

是より海乃女の詞うと

あは志のうみうらあうと

あつがあうとあはうとあはうと

あいのうとあはうとあはうと

のうとあはうと

あはうとあはうとあはうと

あはうとあはうと

^深 ゆかりよりあはうとあはうと

うらあはうとあはうと

^花 源氏のうらあはうとあはうと

とまふ乃事ハ其由余トモセテまふ
セムハ一ニありと云フ一ハたれも
はく一昔云ト云フハ一ハ余トモ
トモ志クセザリ一ハ一ハ一ハ
美曰昔臺ハ凡結ルト云フ一ハ
何カ一ハ一ハ一ハ

源の方ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ
一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ
云云ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ

何入りめとあやうりし

美曰物故乃批判ク

美曰けいも事乃あつ一ハ一ハ一ハ

一ハ一ハ一ハ一ハ

何やハ文ハ錦一ハ一ハ一ハ一ハ

一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ

平生ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ

美曰ゆ也乃あつ昨日の事ト云フ

一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ

延喜集

子乃地のこころ也

予の人の神ありこころはこころをたれとむら
わくつをてあはれとふんが

美 多海海はたの系大唐の樂をたれ
外玉乃のの遙かして知ることたれ
と那乃乃のの志建こころ也

美曰あはれとて年の若き乃乃と
一向よけさうたふといわさう也 日昇 秘

向

或云浦人此神あり遠くは法
乃乃ら乃乃らたれ 向 乃乃ら乃乃ら
名海をたれい白濁と 然る神也

よかろ人といわなれ

因去云神ありこころをたれとて年の
若きとていこころをたれとて事なれ
こころ也 是美也

むか 秘

舞乃舞乃とてあはれとて
美曰あはれと

兼河院、源十菴つがのむけをうけ下
のふあふ火大くたにゆえーせりこ
る 望 秘 義 曰
菴はかのみり視こ

りきりかきりひりりり
是より源の心

かやうりくさく人

菴の義曰 契

兼曰樂あふふふとり中安治よつこよ

たのふは唐綱のつこくこふり別と

ゆーますと源れふふ感しゆ之 秘曰

人乃みく

秘 唐 綱 云

内名し葉乃

秘 名乃内志うらとん

兼曰菴つりこくた立名乃慈くれと

源の思ひあふ之是と只今菴はかか名

よあふゆを云不審く兼うに海よのさる

くれつこ然つて源のひてしとやあま

きてとあふ時を云ふは
名ふく云ふ

松云河小則天皇后々の事といふ
海流小及る候あれと云ふ

ちとやうりやう小 持經の冠小

笑中小乃小ひんぐ小み小
乃幸小み小ら小

秘是より幸乃當日の事 笑曰

笑曰花小前日也小 一

東宮と云ふ

笑 延喜十六年三月賀正小

子け時の太子ハ保明太子也

松云け物小乃小兄小葉小花小

りありと云ふ

笑 河元 唐右小

天平十一冬十月皇后宮小維摩小
終日供養大唐小乃小葉小牙小八
乃唱此言詞

くさおがうり

養曰種く乃樂教のりさへ

秘曰

はくも乃をし

太鼓 鞆鼓

三ノ鼓

をくして多し何り

日くひ乃臣氏此ゆ夕くけ

試系の日あまり初るまて是て終

右より幸此日何初終うとある

秘 夫人小神をくくくくくくくくくく

みくくくくくくくくくくくくくく

くせまをん

ねえは事ハ弘徹殿の初つるくく

とみくくくくくくくくくくくく

春宮乃世御ハ何れくくくく

是又弘徹殿乃事と

くくくくくくくくくくくく

養曰 奥あり

くくくくくくくく

養 當時証分乃人と

秘曰

河 右族之 華族之 又ハ有職之

宰相少子ヲ出ツ婚右族ツ婚

養樂下乃車ノ系圖乃外ノ金

二人の宰相養儀在馬婚系儀右族ツ婚

御賀系儀事多儀例

延喜十六年法皇御十は賀樂行

保志干時三本

母小が人てまゝわくとらつ

母小とくれらうと御通はらうこれ

ハハ福て乃極古ハ極とて

木多めり此お葉此け

養花。是より御賀乃日あのみと云

養日此養絶へ

約幸乃日はとらり當日たつし

私言養此集あてこれとけす之從

行幸此日と云より當日此あ

てまあひの初ハ前日の事成ハ

らるといふと相違らまらき此

志乃やつくともかうはる

折御前花のさす

西宮抄 隆時 康保三年三月十日花

宴小時月明風和折花并云以下冠

己上義

た大将の一人始

義系圖乃弁此人 純日

えあわと
えとす
ありあり 天の氣も是と感

天の氣も是と感

又た此の

義誠系乃時かとあるなり 純日

義也曲れととさくとは誠系の日じと

さまりととさくとは誠系の日じと

面白

つあやれ

義 何 年小有取後入後云

花 後新云

時多二村少とと入り乃

きふいふさゆと

顕眼注云舞十入阿やとてさるに取て人

しそ面白くまふよとせそ時ちれあや

の都やまらるゝ詠之と 己上兼

若景上十柏木乃右出の指らくと人の

入あやとまふとあり

物見志る海一と

秘面白く詠へ

兼音後のほくくた回乃みこ

舞女御注とあり

秘桐壺乃みここのほみと

兼桐壺帝才回皇子常告部々乃は

さうつとこ

志るあうら

何枯風系 盤渉調

あつとこの

源此舞はほくそとてまもるさうらあてと

さるる前はひくろ和明親とて七歳とて

いづれも事成るべし

いさよ

あまのりや面白き事なりて奥に

ありて世俗より

美なりて奥に

ねと喜ば波枯凡そなりて

これ事なりありて

いさよ

源氏此中将正三位

美 延喜御記云 貞観以来奉修時

有叙位例

等曰今日行幸貴必了有く又

美これありて

正下シヤラテ乃か

正四位下松叙

六乃君松い

源氏い

源乃何

ふりたさゆへにれゆいゆへにやうと
うとくもなきこりゆいゆへ

きん乃世ゆへにけたり

糸 世に戒行乃たりさう志くゆへ
深乃あ世のゆへにゆへ

富のその比ゆへ

糸 まんてゆへにゆへ

菰壘乃里亭へ退出く

うへいありさゆへにゆへ

後には乃ゆありゆへにゆへ

多ゆゆ志なゆへにゆへ

あゆゆゆゆ

おほいあゆゆゆゆ

糸 蒼上の方へ

同書さむれこゆへにゆへ

糸 かのゆへにゆへ

蒼上のゆへにゆへにゆへ

方ゆゆゆゆゆ ねえいゆへにゆへ

事として志しと何事も疎遠うらやと
ふふふ二条院よりけりかきとふふふ
ふふふ思ひふふふは是の世なりとふ
けりふふふ始ふふふふふふ
ふはふふふふふふふふ

養上るは心

うらなくれありさ復の志り始りす

養上るは世の世といふをふふふ
ふふふふふふふふふふふふふ

心うけりくまの心は心なり

これハ養上の性をこころとらふ
ふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ

教とていふは

源の心

人乃而ありふふの

葵上此より下不足りたるは
人よりゆかに

湯此元膳の和より此よりいふは
心もとあつたりぬほしと

ゆ乃分割もたさしと
けりしあをたれ物んとさしと

葵上此四んかろくねしはのみか
と一ぬんと穂よるるはと

ことたりと

人よとれるこのやうなをさしと
此よりさるる人よとれる事と
又葵上はあつたりと

葵上は版紙の別と

人乃ありたるの 葵上乃いさくと
らひかろくとのさしと

人よりさるるのさしと
初て柳のさるる物と

ゆととあつたり 始よりあつたりと

うゝ若てび久路一舟のりし路
二条流乃舟の射るもあはれは後始
らぬさやあうともあり
まれも明くま

源あり

うらひの道とともくはてせんか
まてあうとせあうとほ

三光海深の時をくさあてはてせん
まてとよ後まうと魚舟のれとくま
あうあり 九孫同く史書よき
こえさあひも舟とまてとあり

南ん不けりか

政所 家司 家申とよりかこまの
しるり 船つゝあはれとあはれ
あまそと各別よ定よとあは
んりありと

何事と不足たれとく

おれらよりほつ乃人のいふつあへ

養家司此中にも推光りりあへ

は事とありしよし志つあへ 秘目

私言及たりり乃人あへと前此初ふ

つら二多流りり半くみたり

か乃ちあへ

社 乃あへ

むめ君行とんく

世に故尼長と時くさひあへ

君乃むくす

源乃むいよあへ

やらうとく

源のあへ

いさうとく

河 若く

養日屋字

世と乃神

いさうとく

源の心

志の心なくはなれぬ

源の心

信都の心なくはなれぬ

秘

父の心なくはなれぬ

源の心なくはなれぬ

あやの心なくはなれぬ

とらふ心なくはなれぬ

かの心なくはなれぬ

秘

志の心なくはなれぬ

兼曰水山の心なくはなれぬ

信都の心なくはなれぬ

三条宮の心なくはなれぬ

秘

源の心なくはなれぬ

兼曰兼曰
兼曰の心なく

會中細心の君中替

秘

三人の心

兼曰

けさわらひと

あやふらふとてはなせらるる

河津万葉

あまのりよとてはなせらるる

日

志河 志河 志河 志河 志河

源の 志河 志河 志河 志河

志河 志河

志河 志河 志河 志河 志河

志河 志河 志河 志河

源也

あいらしむ

あいらしむ 志河 志河 志河 志河

志河 志河 志河 志河

あいらしむ

志河 志河 志河 志河

あいらしむ

あいらしむ 志河 志河 志河 志河

あいらしむ 志河 志河 志河 志河

わが身と女と一て苦むらひのち
あはれとふ養ひてくれ

かゝくむらひ

さくさくは涼のちよひ葉よのち
あり又あつかなる見うり又ちれ
人物とくむらひとれり

喜とけは涼はれり
うらとけはれり

涼の極押しつ

細い志とれり

多やとせ

むこむか

心よの事と苦むらひ

むらひ

女めてんや

養ひてくれ

みくら

関去涼は女とありて

私云 業ノ身能ハ

久めきと侍はむ

其ふふ方心はく

くれぬまじひのうら

菟つかのむすむる巻の中(きつ)

乃入まじ

うむのふりて終

相違のみとの源れおまぬたり

志つかは菟つかのりおまひる巻中へ

り入一書はむむてあらむ終

うむたきや

業子の地

志しくと侍はむ

源の詞教の字れを細いふか

しそと侍はむ

対みりすを終

しそと侍はむ

志しくと侍はむ

ふらん

高乃山守一

菟はなれ

あつし

海の波つがよわひきりぬつるや 若葉

よらう一草

くひりしやとおられ

命相のちよ菟蚕の山くら思ひ

はらねのちらうやとおりみこあま

んよはさ

^秘もろかろ葵や海の色を

箒田菟つかれ山くらうら

あし

第少平よ山くら山く

か納まは

^秘又是より葉の事をこく

大切し

らす

おほい夜も寝んしとれんて

秘

養ふてあう〜こいお衆れ所是所も
いと寝ん〜あう〜いり養と本妻に
てた出居れ女なれいり少納まうん中
か〜あい給らんほ〜ん

秘

はまどのおとあ〜くお給り〜いあん
と思ふて

それ〜く〜う〜ん

又我とあ〜さ〜じり〜あ〜り〜もかほ〜後

て源れ慈切よお〜すれいあ〜さ〜事い

あ〜〜とぬれり〜あ〜ん

い〜く〜く〜く〜三月〜し〜い〜ん

養 何物忘今日祖父母父方者暇亦日

暇五月 母方暇亦日暇三月

花 実君此外祖母九月 逝去母方此

暇三ヶ月ううに依て十二月晦日陰暇

御抄云け陰暇九月此末〜り〜あ〜れい

十二月よる〜あ〜〜あ〜〜御暇〜あ〜ん

とあり十二月晦日と云々也 己上
是乃祖母逝去の九月廿日此とあり
九十月八十二月亦有此如へし晦日と
除
勝ハ日と云々ハ此也

圖書昇ノ義ナリ

又むやと云々

養家乃若此母と云々也
卯祖母此を云々也成人の云々
ハ心妻の勝と云々也
の云々除勝と云々也
此也

後云々云々云々

為知云々

養花祖母此恩と云々也
云々云々云々云々
云々云々云々云々
云々云々云々云々
云々云々云々云々
云々云々云々云々
云々云々云々云々
云々云々云々云々

己上巻

ちりりりりり

因之地のふくぬかと文と織りく

いぬめりりり

義安は程ハ膝われおとさ給てあつた

おとさ給てあつたのよふあつた給て

源十八女の正月ハ 花巻同コテウハイヨテ

帝ノ用之ウハイ 女巻ハ

花 小朝孫ハ朝賀ハ事ハお祀スト

ハ 小朝孫ハ神武天皇より始ル延喜

年傍心さる

又同九年よりおこあつた群臣の言はる

又河ハ朝賀ハ言ハ非ハ 己上巻

松云コテウハイ小朝孫ノ後 云事根源抄より

きりりりりり

源乃紫れりりりりりりりりり

きりりりりり

元日なれりりりりりりりりり

うらぶと給ふ家

秘 源へ

い流しひつかをそしとて

年あそてなうてまれのうらぶと

そとわ給ふり

安虫そりくそあつふんかひん

乃あそふ押へ

三尺此と流し一しうひ

三尺の押厨子一雙へ

ちいさな屋とも

いひ分の屋を

かやとぬとていぬさう

秘 此れ初へいひ分の追催へ

等 何追催 十二月晦日 鬼屋のい此事へ

等 田けいひつかをそて追催のまひ

ひんへ

等 何金谷園記云 已上を 為陰氣時絶

陽氣始来陰陽相徴化 為疾病之鬼

為人家作病黃帝使防相氏黃金四
目身著朱衣平抱押福口作儼々之
声以駭疫病之鬼至今歲除夜為之

王建^中宮詞詩

金吾除夜進儼名 畫袴朱衣四隊行
院々燒灯如白日 沉香火底坐吹笙
除夜^ト儼と進^テ之鬼^ハ心^ハひ^ト云^ハ進
乃^ハ字^トと^ハ心^ハぬ^トし^ト又^ハ儼^ハ此^ニより
と^ハ鬼^ハ心^ハひ^トし^トび^トり^ハ禁^中より

く^ハり^テ法^家中^ニあり^テ事^ハく

私^ハ云^ハけ^ハ中^ニ女^ハく^ハあ^ハま^ハと^ハ鬼^ハと^ハ禁^中
の^ハ儀^式云^ハ事^ハ根^ハ源^抄より

因^テ去^ル晦^日より^ハあ^ハる^ハく^ハその^ハもの^ハ子^ハま^ハ
あ^ハる^ハれ^ハ又^ハ一人^ハこ^ハり^ハら^ハる^ハれ^ハ水^ハ山^ハを
崔^乃子^ハあ^ハる^ハら^ハる^ハわ^ハる^ハく

いと^ハぬ^ハり^ハと

寂^大事^ハく^ハ思^上乃^ハ事^ハく^ハあ^ハる^ハあ^ハる^ハく

け^ハみ^ハつ^ハと^ハん^ハく^ハ美

秘
源の綱

多々といふ事にて

秘
正月一日の事なり

取せしむ

源の事なりといふ事にて集内にて
とあり

むいかの申は源氏志

前よりとあり

あつと多にすう

秘
少納言の綱

物うくせし後始か

是まて少納言の綱

あつひよの事にて進みといふ事にて思ふ
事んといふ事

が納言といはる事と歎してつづつて

ころころとありてせしむる男おと由り
ありてといふ事

このうらに我は

紫乃白れうらへ

我ハさへはて

い夜をむとほしきなりをみか

秘

此葉のおさかへは押こが細玄乃中めて
うてい男のらりらりとさひまをす

はくしつと此年此較きふ志アかきり

は初葉子地れさいつとといあそひのめ

ふとつれ多ともとをがとれらぬとせ

あつたはれすきふ志アかきり

かくねをたはれぬまゝの

人よ志をせしと源の志を人とせつ

三条花よさうめんとむらぬま

ささうして不審よさう

いさうらひぬ

あまがさうしてはれさくあつた

乃志して不審よ思ふ

うらり大庵

内裏より養乃上れ父大信れくつかい

まゝのうはり〜

秘

養上のさゆ〜二条院の人

あふあふ

〜

ひさし〜

時と引〜

あ〜

秘

源の初

〜

〜

〜

〜

秘

二条院よ〜

〜

〜

〜

〜

〜

秘 不足たり可るは

多心此

源乃我と知りよんは
秘州一志とせ
みまて源乃中へ

秘 杉新 大臣と

秘 弟子地 兼曰

た大臣只今乃重臣と

富とくに

當代乃活めいへ 兼曰

秘 心よりい活め

た大臣乃文服よひよりいとめ

めさ満一と思ひ

た大臣乃これ心

秘 杉と君を

秘 源の何をも杉はさぬ

たしとらさうもとあうこひひ向ふ所は此心

らとちなる

秘 ありとこひ活め教活めありひ活め人何をも

てしるゝいふしありんかり物さしれしを治
言く 已上装

私之玉^{ゴクノツビ}帯有文無文丸^{丸トモ}靴巡方あり

三位已上用之事より之四位^{四位}兼^兼侍^侍也

碼^マ碼^マノ帯 九靴ハヤリ之石^石帯トシ

四位乃人用之

犀^犀角^角ノ帯 巡方 九靴あり

六位用之 四位と時より之用之

烏^烏犀^犀ノ帯 是ハ牛角めてしる丸

六位用之

あれハあいえんあし

^秘源の初之し一日あしけ帯ハるこ分るり

料^料破^破ノ多^多 装日

^昇正二三月中に清涼殿あて文人とせり

て詩^詩成^成作^作り海^海ノ事^事あり主^主上^上分

らひ小^小執^執柄^柄赤^赤文^文袍^袍と名^名を^を保^保元^元り

信^信西^西ノ^ノ衣^衣を^をひて^{ひて}後^後ハ^ハ終^終る^る事^事ハ 一注

私^私之^之装^装内^内寫^寫事^事ハ^ハ書^書入^入了^了れ

私公事根源抄之内宴 正月廿一日
内宴より内より節會に仁壽殿まで
移りあがり文人と題と給り詩紙作
りて座して御前まで梅より花廿一日廿二
日の程子此日何々々々々々々々々々々々
二三献の後親王公卿は若菜此養と給り
保元小信西より約ひ侍り後々々々々々
侍りあがり

私弄より一注とて志る〜〜〜と相違り
不富程江次第西宮小川勅へ〜

それいふ事それなり
秘 大長乃詞へ
先それなり後
逸真たりの神と〜や

若小より河よ

これより深のさ由成ふ

くは深のさ由成ふ

源成りかりを先よおかりともむこる

ついでりそくやなはけ人おとす

さんしりしりてし

系座 元日 系智乃事く 箋

内喜宮一洗

箋 河 内 相重帝 春文 兼重院 一洗 准定平院

相重帝 音親也

花云 陽成院 可申承

一洗 若小あり

一洗 若小あり先帝よりかまし由

しりてりり

若小介乃三条此云

源の系智

若小ありしりてりり

源乃河さ由と若小介の由層よりめ

あゆりく

宮ハ本下乃むまより

菟つかのく

北河と事志けるより

菟つかの西中へ

こ乃西中此志のすもる也

等菟つかの西中乃乃之源ハ四月は密通

の義あり 義曰

二ヶ月ツリ此相違と云々也 已上義

昇

源氏密通ハ四月はみかしの志あり

三月よりちり人まゐり

細同し

去年三月は菟つかの西中乃乃源

氏密通ハ三月よりハ十二月ハ

月よりこれをも源ハ四月より此の義

志れハ正月よりこれをもりハこ

在二月十余りに御座あり

こ乃月ハより也

秘
正月もつらうとて思ひ

はれぬとてつらうなり

内
月も正月と又さかしく

うらみとほをようけ

内
裏うるとは舞乃西月さく

文人の友はかのみ人し

はとれをりや

は懐妊乃事とほ物のを備えしなとて

くろきをりりり養うとて前より

宮やとよひ

友はかこ

身乃つらう

引弁よとてん

はららとてとく

友はかたつらうとて西舞のをほくよ又

わすれにわはらなをうれいさく

中将の君やう思ひあはせ

秘
海く

秘

はなはた抄圖書ホトウリ一書ありせよ
あまふん抄一書は事くは西暦の月の
のいわりあてりよく源は我子とふ合
ては初るくく一書あり

みとわくか

は時の初はゆきるや巻よふなり 日

はとはあく

その事よふあく

世中乃うこはん

秘

あつがれ 箋曰

圖書之あははは西暦の月いやくは
ありてりし大事に初るす源のい

秘
私之はあははと葉とつに源のいのみ
て初一西暦の月いやくはなり
ありて初無れりあくはし加はて
みうはての對面とわくそやくと
とされとふりあてり初はし箋
あはあつがれとありてかくは

キウラキトウアラニリ

あてきくあり涼れ心とて可成

二月十余日乃ほとに男みこ

集回冷泉流也

紅 一ヶ月あらく

かきう移くうらじと宮也

は程西産近行と思ひまけさる所か

く三條交わと内裏也とらこひ給

命おろくと

秘 故はなれ西之は次より也とあつと

おのりすく是の源北密通乃事

是のけくぬ

弘徽皇后のけく

呪咀

ほもとた人としてけく

けく

図書 呪咀ハ日本紀ハヨロコブ心ト故者

田右若末猪兼右卿申すけ事

秘 弘徽皇后の后とけけ時何とらう

うは〜り終る家

^秘 源十郎あまを

言乃口ふおあ

むよ川ありあれはなるん

^花 心乃杉木ふおえう〜く思ふゆへ

松田心木あやまりあつ時を〜おえあ

く思ふゆへ

因書源十郎〜似多つ家とくる〜

友臺の思ひひて源十郎〜若き〜とせ給ひ

人乃思ひひとりや

源乃密通乃事

身のみそや〜う素

られまそ友つがのん

會ぬ乃若し〜あまゆに

^秘 源氏逢流へ

言乃源十郎

源の思ふを〜う〜く思ひゆへ

か〜し〜何れ〜らに

秘 會ぬの詞

いばとれはく

秘 内へ居系れ時人知くまうく

秘 たりつらまゝまゝみまゝなりかゝり

秘 源へ

そのつらみはひせんといひされは會婦
と源の四つは我といひ源とみまゝ
とみまゝはひされといひは書にさだ
ととのぬいゝは事あれはかゝりい

秘 母と事あれといひつらつひる

秘 源と會ぬとのぬ

人はてあて

秘 友はかまひつらまゝ新面とあんと

いゝむして源のまゝは

いゝむして

秘 會ぬのぬと源はまゝは

原 いうさばよじりては人なかりにては

まゝは中なるては

美日色去乃宿挑り志了れぬ之埃おれ
こしつくりおしくちりくめ志うは申れ
るてそいありまうし事さそ是この世とい
ひて子乃命あり 花日こよ美

因書し此つ秘れ申の子あるのそそそ
く志うしさゆそ是の子れそそそ
乃所んれるそそのゆう成りか事そそ
は世れそそ時こ一多ひの達ゆひまう日
一そそ所んれるそそそそそそそそそ

五事うとそ

何とそそそそそそそそそそそ

かゝる事こそそそそそそ

美日色去乃宿挑り志了れぬ之埃おれ

何とそそそそそそそ

高乃おれりそそそそそそ

命ぬの心

因書 故つそそ源乃事そそそそそ
何とそそぬおれ

秘

色官ぬ

さすりしとあつてもあつてらひいふ
んそとむふんぬらとつにむきんん
れ人乃由よてぬや

義曰んそとの命ぬの抄に敬重といふ
んぬらとつに源くおふ下の人志きあると
あやのそやこ子ひれ會

昔よりあと思ふた由らふといふが
侍事よてうと也

正

こやせうんとつと子れらとむかひ

原とのむく

昇

より高の由事とらあり

秘曰

秘

んそとのむかひはくもあつて源く

因書同く

新云義ハんそとの命ぬの下より松并史
書ハんそとのむかひはくもあつて源く
る或抄西院に命ぬのんまつてせて
あといふ君候うけうくあつねみ
なるに源のうけうくあつねみ

しありては是の業の業に因り又故
つたなりゆふまれの前より初まればか
りみされはうき波子とてもてまわれ
りてありされの常にん始り故つたそ
まよつたそ物成りなり又深の
若まどゆりくひらくは命
母のしりかき死にやせり人れゆふ
てよるまのつる二人ありは親の
よおとつたそみらるる人て存を

如何

何れもゆふいふ業の事とてくれと

業緩るぬし

¹⁶ 無心後心ゆりてん ナキコトニシテ 志よじり

ひきこ

私云ゆ勤もねく平に心やとつる中とて
は河あてんそも思ふとぬつこの故つた
源乃事とていふとていふと存をり
志れりて青あきなり

命ぬ詞

かゝれいひの原のこゝろにて

源のまゝにわたりて命ぬふ時よあはれ
いと何れいひをたゞそへりりあて
ゆゑとよみまゝに

人乃物といふ

菘はかた御心也 兼曰

兼曰まゝに命ぬる源乃物御心物と
すつんとしりともあひぬりすりま

まゝに物と物ととるは縁妙也
ねやうは源のいひ物と申すは人
乃物といふとまゝに御心とす

命ぬと

源乃物と命ぬととよみまゝ
うらとけしつひ

兼曰まゝに物と物ととるは縁妙也
あてんてとるは縁の義と又やとるは
まゝに物と物ととるは縁の義と

人々多しき〜

養曰俄々命ぬと〜と〜れ人乃不
害あり〜の用捨奇特也

人乃りた〜の〜と〜ん〜と〜れ
ぬや〜ぬ

あ〜〜と〜れ〜物〜

養曰物〜の詞は後二あり上此の源
のた〜と〜れん中〜と〜と〜
〜と〜と〜れ〜木石〜と〜と〜

〜と〜と〜れ〜と〜と〜と〜と〜
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

養曰命ぬと〜と〜れ〜と〜と〜と〜
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

義王命ぬる心へ

義田由へくの所あつらひよかつたを

と足悟乃外よ思ふぬきと物治る奈

まらつて

四月ウツキより

着宮と糸内へ 義曰

あさゆき

源より文のよく似たり

松ほ

御門の西へ

又る秘ひ

かゝるくうらうらう人此行とみえり

いつまもわたり物おほきと 義曰

又とは外よ別れうけりくとも

ハあしあれは似るまゝと又源と御

兄才乃心あれはこの外うらわま

義容由を双乃在似るひふりと

松とほ

みよとれもろふとくしはさゆ

源氏乃君成り終り好く

源氏東交ふりて終り終り事と

情く終り終り

秘

源氏交交服の在り相垂れ奉り終り

んく

源乃多し人あておん千う成り終り

あつししく終り終り

源氏と交交終り終りに終り終り

源氏ハ先帝乃皇女との成服よ終り

源氏と交交終り終り終り終り終り

源氏と交交終り終り終り終り終り

源氏と交交終り終り終り終り終り

源氏

源氏と交交終り終り終り終り終り

白雲を指

おのひのちのちのちのち

紐 喜文母とお母さん

文のいろいろ

着文の源十郎のつらみと又あまの
つらあつひのちのちのちのち
とあつひのちのちのちのち
中將のつらあつひのちのち
源十郎のつらあつひのちのち

いぬさつてなせ

養日源十郎のつらあつひのちのち
つらあつひのちのちのちのち
みまのつらあつひのちのち
或抄子とのつらあつひのちのち

みまのつらあつひのちのち

紐 物定く 養日

そのつらあつひのちのち

紐 源十郎のつらあつひのちのち 養日

昔は皇子をとりし外戚こそなむとて
各名家よりやるといふとされと巻君
あしむるもあつらふとあつらふと
しるもあつらふとあつらふと
夕おさねくもりはりしとみよるはりし
ある程なり

若宮の御うへの程より御父の御
より之別して御父の御と又外戚
こそなむとあつらふとあつらふと

おろひしとあつらふと

物乃の御うへの程より

おろひしとあつらふと

御父の御うへの程より

おろひしとあつらふと

源の御うへの程より
あつらふとあつらふと
あつらふとあつらふと

中将君おろひしとあつらふと

因書るもの他なき 源の宮殿ともあはれ

物ころりか

秘

若宮大行の御人此はのりあつたは
我身あつたれは似るんこのみだ
しははる

義田源此御身源自をくふん
あふらたなりや

義弟子地

宮のころりか

若はかめ

中納のちりか

ころりか

史去二系院の内源此をみか言へ
乃はる人みかこりか
紫じのむかふらるるい海もまぬ
むかふ人あ載れ

何れれく喜みもつれつて
乃はるにさるむらり

つひ終身

秘

弟よの地

養曰

源
よそへにのみつよふくたしとてはてはるまじ
はるかあそしよの地

養曰 新古今

報上 贈伊豆文より

ひてよまのまうわひくう時かお義孝
久しくぬいせうけつたあそしよの
地よつちてつらきる 恵子女王
よそへにのみつよふくたしとてはるまじ

あすつまたそしよの地

養よそれとのと

秘
新 阿そそ

たよこつねんと思ふまあつと

秘

あそそつねんと思ふまあつと
あそそつねんと思ふまあつと

川方

秘 養曰

因書しよつてはるまじよひぬくう
まぬし又あそしよの地とてはるまじ

—こゝろに宿の地をいふわかれ

ねとけちよ、こつらふもくもれつらふ

今折てとらひつる面々のうそ—これ

花減りう文よ—とてんをれいふ

着ふ此の筆乃ちあつてあけさね

あまた又一つ、こゝろあつとんをり

あつたよ—とてんをりつらうあけ

この面々のうそ—とてんをりつらうあけ

つらうあけ—とてんをりつらうあけ

くつらうねまき—とてんをりつらうあけ

わくといふれとんをり

さうわ—とてんをり

あはれつらうあけ

あつたよ—とてんをり

ちつらうあけ—とてんをり

こゝろに宿の地をいふわかれ

思ふよ—とてんをり

一平つらうあけ—とてんをり

ね

義

またぬふ畢ぬと

らうこひあう

秘

命ぬのうまうくさひてく^ららこひ
あうさうらあひはく

まいの事あれと

秘

うらみの能うに西流しと^あらう
とゆえさう思ひふて涼あう

うねうまはと流りあ

うまうまはと流りあ

はくく

あつたれゆと^あかからるるあまの掬く

あいのさよ

二条乃流の西對紫乃おら^あま言く

あけけあ

源の掬く

あられと^あらうと^あらう

あうらさうり^あと^あて^あま^あと^ああ^あはく
あうらさうら^あと^あら^あ物く^あ

女表ありけり花の

^秘葉乃神へありつるむいふと〜こおと

―ろさくはさゆへ 養日

あゝさうこぼるるをうけて

これまての葉の持へ

おろしゆ〜あ〜と〜も〜さ〜う〜は〜ら〜ぬ

養日二葉花へ源乃つり〜あ〜や〜と

葉の方へ流れぬぬの腹立る〜是ハ

あつた〜乃〜あ〜さ〜ぬ〜い〜又〜は〜を〜り〜あ〜と

足踏〜は〜神のありはらへ

まゝい形〜と

^秘源のよとくおろしつる〜み〜わ〜ら〜え

是ハ葉の心を察して〜も〜ら〜ぬ〜

〜〜〜は〜い〜わ〜て

源乃さゆへ

こらやとのぬと

^秘こらさゆへ

ねとゆへ

葉のさあけりし

入ぬる破れ

葉乃口とさひ

葉 右 何みらめこそ入ぬる破の葉あは

ん飛とくおくさくくたあひ

くらむりひ

因去葉乃やとさひあくくらむりひ

あかみくが夏事

源の詞いつのまにわらうも口さるれ

つかりとされのあはるさ

んはめまはく

葉 何いせりやまは朝れ夕なま

てふみらめよらんはあくさ

或は神説おとあまりつひのみ

あはらとらえまこと

乃とらふさとの治り也

正しくあま事

はらめ

第一の秦声也世謂豪帖為一絃有十
三象十二月其象同也

中乃ほと絃の

第一中ノ絃

第一の第一の太絃 四筋 中絃 四筋 細絃 四筋

合て十二筋は外より中ノ絃一筋とて
先て細く十三筋中ノ細絃と云ふ

河花あ抄ノ流石遠人の見事此細少
なり成中乃とりては是も同

已上第一

秘

第一の十三筋より中ノ筋は二筋とて
乃絃ほとてそのほつとの中乃筋一
のりとはさうの如く見事とておとて
中乃おとるといふ事を知るべき也
中此絃のせりりり成とて
んかろ

イハルニヤ又平調ヨリモカリタルシラヘテ有ル
平調律ニホクロクセリヲヒキ給ケルニヤイウシニ
テモ其理有ヘシカクキ調子トモソトアヒタ
ノシラノ調子トモソトヘルニマ終ニモ調子ヲヒキタ
今ノ世ニハ管ハカリニ吹クナリ侍ク又平調色
多レハソクヤ長享ニナセ記ク同人記ク
兼四ハヒ前此志クキ紙調ウクニ
イハルセヨリニ調多レハ巾ノ結ナ
調ナ切リテ信ニ此也又盤渉ハ
さりあさりハ平調ガ此紙ナリ
ケル調キ紙をニニナけて
是ノナリ

松本は版心ヨリハ振ナリ此をニニ
テヨリハ紙調ニナリ
由リニ調子ハ平調ナリ
ニニニニニニニニニニニニニニ
ニニニニニニニニニニニニニニ
系ノ破ク昇花ノ義也ハ和ヲ紙ニ

八々の部、平調あり、品くともあり、河海、
 也、長保系、右樂、大倉調あり、大倉
 調、平調乃、聲あり、品く物、笛、大倉調
 又通し、うれあり、く、く、く、く、く、く、く、く、
 又、昔、の、終、也、調、子、と、ひ、く、と、**梨**、**花**、の
 養、あり、う、れ、う、さ、あ、く、せ、り、り、う、さ、く、く、く、

笛ノ元ノ名

子 ^{丸ノ樂ノ笛} 子調 ^ト 五 ^ト 上 ^レ 夕 ^サ 中 ^チ
 六 ^ロ 下 ^ケ 口 ^ク ウタク子入

子 ^{右樂ノ笛} 子調 ^ト 五 ^ト 上 ^レ 夕 ^サ 中 ^チ
 六 ^ロ 子調 ^ト 口 ^ク ウタク子入

えあしとらそと

紫のほくとえあしとらそとぬ

きしあし

あしとらそとぬ

あしとらそとぬ

たぬ

養田たぬと取ト推ト由ト

あしの音とらそとぬ

宮高角徴羽の勢ノ位とたぬ

何よりよき

うぬすてけ

あつらひつりつりまふとあつらひつり
秘密の網子さつとあつらひ

あつらひ

一通はあつらひつりつりあつらひ

あつらひ

あつらひつりつりあつらひつり
あつらひつりつりあつらひ

養 河 長保樂

太食調右樂之 破 保曾呂僕

急 賢利夜須

樂乃目錄うすたはほろろくせうか
あつらひつりつりあつらひ

あつらひつりつりあつらひ

あつらひつりつりあつらひ

あつらひつりつりあつらひ

あつらひつりつりあつらひ

あつらひつりつりあつらひ

源乃庄依のくこの雨乃より久しき
いりさるるを

いしらすて

源乃を

ほりかろをひりくわ

源のまよふ始り

うらうら始

世のまよ

まれとひと目也

秋と一日とむねをいさし源乃初也

花
一日不見如三月也

く孫く

ク子ク子シウ 物成く孫也

人乃うみねらしむる也

源のまよふとむねをいさし源乃初也
のうみねにむねをいさして源の久
しうあつてむねとむねをいさして
とむねのむね也

山とてんくわくく

ねさるん中かきす

る屏うたうばふ

なそ西の

案の

あしひい

深乃西化出

みれ

あつあつ

ねとの

御膳

い

海と

た

あ

紫乃

し

と

くさくさ見すそこの

母

源の初也

お言源の初也

いづれも

つらつらと見ればはるかに

よのつらつと見れば

はては世の初と見ればはるかに

あつたつと見ればはるかに

ちあつと見れば

源の初也

そらつと見ればはるかに

あつたつと見ればはるかに

いづれも

いづれも

はては世の初と見ればはるかに

あつたつと見ればはるかに

いづれも

はては世の初と見ればはるかに

此と志しれとてわすは源の御
事、御しよとつた人、そあじし
何てやうに言貴とせり位か
と御つさく、あゝの御事
うらまふりかて

内裏あつりのまつ人、一旦源の籠
— 御つたつてわすらつた人
乃とせて、御事、御しよ
まふらつた

んるけよ

養子とあつて

養子とあつて

紅

おさめつて、御事、御しよ

とつたつて、御事、御しよ

んるけよ

まふらつた

養子とあつて

うらわとる人

^女 禁中あははるはなむー出んて

いとおくたはるあけるおの事と

ひ約乃ははるはなむー思ひるけりか

る事といとおくたはるあけるおの

御心うらむ

けし物をうらむ

是よりみよの原(西)の勅定と

んしあり

秘

夢乃父かみの思ひあせさるるのま
しものやめくむり一かして源の作
源乃幼雅の時よりかくそのしり
慈よこもりつさぬる大長女
つと後うけられほの分別さす
あじし物乃やうにさけれく疎遠
るはうらぬ事と信する

ほくろ乃事なま

かしのあな分別と命しき人あて

かたし源は教訓乃勅定也

うこまりうか

源の神

勅答とて尸を恐るにぬりうら
はよりあなぬさまくむゆぬちりう源
乃振舞の合悲ゆぬ神とみよの
そぬくそくおほくゆ
養上乃又大臣れん中紙可なり
久し源は勅定とて領地を

と持つておろしおろし

はらへしきんくく

^秘みしもの御返し

別々此の御返しは深うと宮中女房
をいふと又こゝろおろし人より
よきそれゆゑとこゝろおろし
乃くこゝろおろしは事ありて
多きとこゝろおろしをいふ
おろしにたつて又ゆゑは

こゝろおろし女房といふ人
とこゝろおろしの女房

かゝりおろし女房

是よりおろしの御返しは
おろし女房といふ人

う福女女房

^秘典侍掌侍をいふ御返し
御返しといふ女房人
御返しといふ女房人
御返しといふ女房人

侍^イハタス節會ノ時ハ内膳司^シ晴^ニ膳^ヲ
侍^トハタス節會ノ時ハ内膳司^シ晴^ニ膳^ヲ
侍^トハタス節會ノ時ハ内膳司^シ晴^ニ膳^ヲ
侍^トハタス節會ノ時ハ内膳司^シ晴^ニ膳^ヲ
侍^トハタス節會ノ時ハ内膳司^シ晴^ニ膳^ヲ
侍^トハタス節會ノ時ハ内膳司^シ晴^ニ膳^ヲ
侍^トハタス節會ノ時ハ内膳司^シ晴^ニ膳^ヲ
侍^トハタス節會ノ時ハ内膳司^シ晴^ニ膳^ヲ
侍^トハタス節會ノ時ハ内膳司^シ晴^ニ膳^ヲ
侍^トハタス節會ノ時ハ内膳司^シ晴^ニ膳^ヲ

わらわんあか

わらわんあか

わらわんあか

わらわんあか

わらわんあか

わらわんあか

わらわんあか

わらわんあか

わらわんあか

ゆれぬ十餘斗事丸

物言ひ兼し及くんをれむけらる

とふあし

いぬりく

源のうらりとも由しあみくゆり不

實しおほくてもあれとのうよは無

事しとも思ひあし

あさゆし

源乃ゆし

物るしゆゆえ

図書只るあれとあし——あひみそ

あしゆつらめていあつらうし

はとゆくりてあし

源のうぬりあしおろす

あしとつ

あしあれ事しりのあしとつ

あしとつあしゆしと源ゆゆえ

あしゆゆり

少書曲傳るしゆくーとをつるううー
深内傳れゆきううーとて如くー

うらる

みまは

みうらまの人

秘

此志うあそそしゆ整まよあう人るう人よ
うらう成あうう成えー 費向

り

中流事書云ゆれううう人乃事人
と西きけううー人いうういれを文

乃其家米飯多うそそ思もうこの西うらる
のんうううー 一祝云西其家米は仕しう
んてこの西門乃を文の紫れ御書衣を
ゆりりてうううてううううのんううい

じ

蔵人私記才十三云御髻若ゆ整其事傳
はく同撰事一人信を定例以る思高を

袍 湯之襦袢紫色緒之 今東ゆううう

るゆ整まよあう人のああれあぬの直衣を
ううし種作うう成うううのんううい

昇
見むみくらさきふらぬれさき
武抄ゆ説きくらさきの人さの白きあ
とさきさき

國去云所とさきさき人さあり又西さ
うさきさきさき家又の命又西さ
くさの源内侍みくらさき人さ
とらんとさき又西ささきさき
の源内侍あり西ささき人さ
くら家又よあり人さ

は内侍

紗

源ありさきさき

はとさきさき

はとさきさき下極辨れさきさき
御と公侍さきさきの西ささき

意れさきさき

義國家さきさきさきさき
ひうれさきさき

かきほりあり

美曰よりまゝに式申あての所へとていふや
うあれと深ゆゆひりりなれいりある
とよ加し—— 養國曰

私にけあひいふつとて申あての所とていり
ていふとてなれとていふとていふと
自筆ノ筆書くれとていふとていふと
わらわとていふとていふとていふと
いいといふとていふとていふと
りといふとていふとていふとていふと

さて林の下草むすとりとていふとていふと
それと治りとりて見ぬつる如く 林
をいふとていふとていふとていふと
りといふとていふとていふとていふと

林乃下車おひわき

林 曰大何とていふとていふとていふと
物とていふとていふとていふと
林 の下草むすとりとていふとていふと
わらわとていふとていふとていふと

春しづまふしは

あふしとくあま

源のふはうしとあふれむあまの
とさめんともうのあふし
とうふしとあふし

のりしとあふし

并

源乃詞

兼 何のまもふくあまのあふし
らま乃あましとあふのあふし

兼 何のまもふくあまのあふし
人とあふしとあふし
他人のあふしとあふし
あつしとあふし

或抄之永正十五は内侍人
かあふしとあふし
あふしとあふし
あふしとあふし
あふしとあふし

昇

花鳥の川舟の如く舟よる舟よるれにや
その初め一歩何

私云花鳥よ 能宣集 人此扉よ大阿

え乃森此ころかきて侍りよ方よみて
と侍りまはれん

夏くまのいふよと海よとら大阿の社
乃下草よひもあつぬくよ

は方とひかり色いぢあつた森と森
乃多よりさう例とゆりて源のま

森と森の初をけ海よとら大阿の社
とむ心ゆりて

女くさとおひいぬに

美曰は源の侍り好色の我々の狂を
くうみさうと

秘

けの侍好まぬ人おらぬよゆとるあは
私源はけの侍おらぬにありを能宣の
あつと人乃らんくうとあつとあつと
侍りゆとるあは

江内島

君—こはあられの物よかりとらんさうりさ
をう下葉るりしと

簀田源のふちよの感と裏よりあまを
とまうし

古今男北さうりきれい 小町

しり門の一村為うとらん思うるあ
物とこぬれ じよ葉

秘 源よ所ちあまのようし

秘 古今一村為のうけはひさう 略し 今葉大

何きれ葉のト葉物ととさうぬさうど
アをさう源ゆゆのとけの府あも葉の
ト葉包ぬさうとさう西向くとさう
くとしさ形—物さ

江内島
あまけいんやさうせんしりとれく物さう
あま森のよくれ

簀田は篠のくはもむいさうれととぬ
あま葉のこくれさうさう必さうしれ人
あま人さうし 花 蜻蛉日記

さしづけん阿婆(あは)こそはゆらち草(くさ)のあ弱
きりく先(まへ)の枝(えだ)の下(した)にまへ

己上(おのれ)箋(せん)

^私は心持(こころもち)好文(こうぶん)の人(ひと)なれど男(おとこ)あはくも
もくもせられゆしとさしる人のあり
しよし也

私(わたくし)よりとさく時(とき)とまはるは石(いし)のまへ
ゆくも人のあはく男(おとこ)あはくも
まはるにさし

源(みなもと)の初(はつ)くまはささしる人(ひと)なれど
まはるにさしるはあはく男(おとこ)あはくも
あはくも人のあはくも

ひんそ

源(みなもと)内(うち)結(むす)の源(みなもと)をむく人(ひと)

まはるにさしる

^箋源(みなもと)の初(はつ)くまはささしる人(ひと)なれど
たかきり也

^花百(ひゃく)才(さい)白(はく)
白(はく)くまはささしる人(ひと)なれど
後(のち)上(のうへ)高(たか)島(しま)女(むすめ)

志わておれうらにうとくふ神れんをえ
もとりほさひささうじりりとも

橋くし程と

浦の圃のたうくは橋乃くく板ありぬ
はかこそくゆくもたれ

昇

河秘義 因去ホ一月よは方といさう
世市よふくやわ物いほの玉れあうは

奥

橋しまれとありたり
あふとひくあはれ橋板ありわら

方こそうゆくもたれ

おと奥入はほら下の方い初め又ま相
遠りりれいあ育乃門方の内橋板の向
方乃ゆまありわら身ては方程(ま)

うへはうち責くそく

所整あるの事とそく

因書おのほさうそくは衣又くそくこ
杉あよほさうそくと一変してほつふ

いしとう

みくしれん

とんあ

西門の西祠源は好まうぬと人

たわうーい じふろ初あり

四結のちほすくし

すうーいしきし

あくうぬ人ゆら

源のちめい

は奥入

あくうぬ人せき

あつとほつ

養 松川方上句

くちわぬ

私玄駄うたてくちわぬ

ゆらにくつる

き衣とた

しつるを駄

ふよくつり

いぬわいぬわくはた

以中將の親と云ふ事と思ふべし
はさせありのこころ也

美日好むゆゑ此所ゆゑ好む心は源内
侍り好むと云はしゆ心は源のこころぬ
くばさるゝゆゑの程と云定めては行末
も人——我と云うはいつとて源のあやと
も人——つややけまれば程多岐くも
席の約うり——

圖書好むゆゑ好むの心は 美史好む心か
是ハ源内侍り事と云はしゆ心は源内事と云
私云二善ノ内源内侍の年多くるまてを
りくとはさせあり好む心と云うもや弄む
以中將乃好むの心めて持う——くさひ
てこころいはささうも云はし美の好む心と
以中將乃好む心は源内侍の心と
みてあり——うらやとあわゆりや

こころ也

美史以中將之源氏よしはさすてハ以中將が

とわりの人まされのいさく

か乃はまおれ人

兼源乃事ゆ云

みちのまのいりまうりちまをふれとやうそ
乃こはまや

兼曰人乃高下高早の限りあふ物
以中將と誰人ふ及へんは誰か人なれ
九源氏乃ちと人あとなんといふは源
氏のとては誰り一まはされ人乃合際の

限りあふ物ぬーこいあや

川弁よ乃くくといは以中將めてとさ
くさめこうはとせ

兼曰うもて乃こはまやうとその好まや
と弟子の地評と 兼曰

私之内侍り白く源氏れつまねくありし
おくさあやと以中將成思ひつとて
何一え事ハ源氏の悪よと誰りいふと
事とて誰りまのいさくありまを

こころひつさかりさふれめてしふく
さめとて行原よりしつらひとあか
好文より事るりさつみあや
たうくさるんと

源乃心

かまぬ物うさに
源の内物も物うさふまのひさる
くおん中より成久しうとつ
んめいじん

温明殿

箋曰 花中衛乃東よりあり 是内侍
此海よりしつらひ

古語拾遺云 第十代崇神天皇 漸畏
神威 鑄改鏡 叙奉安置 神代 靈器
於別所

禁秘御抄云 垂仁天皇 内侍始為別殿
御温明殿 白河院作之内侍 取神鏡
出天欲上天 而女官懸唐衣袖奉川留

依此目縁女官奉守護ら

温明夜の神鏡りりめて別後より

りりす時の湯夜も由内侍所と賢

取とちりもてまゝの内侍所と神

鏡のたひりりりり殿と必内侍所と

ら之は白河院の勅定也と云

おとすまの春真教とそれをも内侍

取とちりもて今も女官と云

主上神鏡と別後より

崇神天皇より乃事と古語拾遺

みさうりとは正統と云

也と裁は儀

多しとみあつと云

源の多しと云

ころ内侍

源内侍も温明殿より

御前ふと云

内侍の遊るるに

不他いふくくくと比巴此上をみたりと
物くはくく

源乃西平かみ瓜池くくくくくく
くくくく又物見の時ひく物乃多共く
あふくれいられよきく物くく

くくくくくくくくくくくく

山城のこぬのくくく乃瓜汁くく
やういーるわさくくわ

いたきじくくくくくくくくくく
まーくくくくくくくくくく

やくくくくくくくくく 催馬楽 山城呂三

候

篁曰くくくくくくくくくくく
まいたせんのかくくくく

山城のこぬのくくくくくくくく
ひてはくく梅くくくくくく

己上篁

因書くくくくくくくくくくく

乃初は成や一乳ほしよふい乳作り我を
思ふをいひて後物のつよにやうんそ
まふをいひてく後物思ひとせんら
いふ成や一物乃妻よ成てたりと
思ひとなくさあやせんいりりせんを
うひのんよつ思ひと行合てはう成
うふや折言と又乳の時分へ
すう一乳ほしよふい

此巴の上よめて物何れよ安えうに
はう成うふいふふ何あやぬ成ううと
まう一乳ほしよふい

かゝ志うにありきんじりう人

此事定家おなまうと志うとあり親
ゆなま又君いついん昔此人いし
あ流あまて神言え各可成あ好

鄂列事

夜園歌者宿鄂列

白氏文集才十

夜泊鸚鵡洲江秋月澄微隣船有歌者

教調堪愁繡袂罷繼以泣泣聲通復咽
尋聲見其人 有婦顏如雪 獨倚帆樯立
娉婷十七八 夜淚似真珠 双々隨明月
借向誰家婦 歎泣何悽切 一間一露中
低眉竟不說

文君事

史記云是時卓王孫有女文君新寡好音
故相如繆去子令相重而以琴心挑之相
如如臨邛從車騎雍客間雅甚弄琴文
君竊從戶窺之心惋恐不得當也既罷
相如乃使人重賜文君侍者通慇懃文
君夜亡奔相如

案之 鄂列行叶物儀意孔深内竹好ハ
しとそくくして山城のうたはくさくさ
鄂列めて樂天乃守成史一にさるるを
一もめれ如何

心
こ乃文君と定家ハ本より鄂列よるらん
んをくわとくくさるんとあり何梅よ

又説とてさされあり鄂列の移物終れ
何よ叶つりしはさされありりとはさうの
方とてさうは源の立さうあり鄂列の女
此とてふと系天乃中りてふ似るやされ
と卯の鄂列乃女十七七八の物とてさうり
源也傳れとけいさるるさう略くとさうり
ささうりていさうりやされよさうり思さう
く文君行多りありてさうり傳りその
此の阜文君とてさうりて司馬相如に

すさうりて白石吟とてさうり相
如とれとてさうりれよさうりや源也
傳りとけいさうり人乃りてさうり
終りありてさうり物終の他者又君と
りてさうりちさうり

第 河内中 又君とてさうり
かきさうり

河海とてさうりてさうり列と用
花鳥の文君と用りり かく列とてさうり文集

才十、夜因欲者宿鄂列と云詩事
只よりう多ふ共くとくあさことりうせ
あり事之是と君よ不ら用在の甚詩、好
婿十七八と云句あり是年齢相違
又又君と用いふの司馬相如琴の句と
て挑て卓文君とゆわれの後、捨
てて白吟吟と他より此年齢あひ親
まらぬよ又君此句は執りてを埋めんに
似たりとてと書表紙よ鄂列と用來り

乃人の苦論よ及んん 己上秘笈同

乃ととまりて

源乃句

ひ貴やそととさうあひみされ

源内納のひりぬひまやとてゆら

まらひ

君あひまやと

源のうまは

何つまやのまらひあまら此ぬとん我

ちめきぬその産ひし世かとかいひ
しと何しそそろう乃産まれそめと
むつそそせまねやんつま
律才二段
兼その産ひし世と云河成とりてく
うぬいませ 秘曰
秘云おの初よ夕立して名所よ
とありぬそそ此初よぬより面白
と
と
と

源内傳のちうぬいふら

兼 秘 同才二段の初

進いよぬいふらぬらすり

兼 秘 けの乃女よらうそら返そと

志うそよ此つ孫の女と思ふそといふ

よぬいふらぬらすり

^{源内傳}立ぬいふらぬらすりあつわにうそ

と初傳ぬらぬらすり

うぬいふらぬらすり

^兼むらたそいふぬらぬらすり

兼曰うらむらふと交ぬるに如く一晴
てふにうらんと有まらぬと云死
或抄稿の字の志をくもくうらと云ん也
うらるけく

け詞あてうらや一交ぬるに如く
うらみさうら

うれひうらしむ

物身ひらうらにそへ有まらぬと云し源の言
たうら源の言をうらと思ひみさうら

こころの思ひぬと何事かてしあはれ
なれ事よこれやと何事かてしあはれ
源の言ひうら

^{七源}人はうらうらとあはれやれは

あはれとるけく

花
内侍のよけの修理をまらぬと云死
人はまらぬと云

兼是し催るる系系をよけを人つま
と何うと使あはれはなれを

願く其くうにいふり物とあしう

こ上秘

筆口人流り東屋の形此つまに縁あり又
人流り東屋の形此つまに縁あり又
うらさあま

人つまに流り東屋の形此つまに縁あり又
ちささくおほい

人よ志さく

じひよ志さく

圖書じひよの好まうれよ源とかく

みされま

松之伴塔池流り東屋の形此つまに縁あり又
ちささくおほい

これとあま

おほい

あま

中將のこり志れ

あま

源の取中將の好まうれよ源とかく

^秘いゆ侍と修理長より口をいれまくす
系圖乃外の人

ねらひく〜人

修理長のあつた〜人

河れより〜出物んよ

^秘源乃詞

くまのあつた〜

源乃のあつた〜

くまのあつた〜

衣通始

圖書修理のうらなひのり知ぬらん

^秘物とく〜

^秘けんのあつた〜

中将と〜

以中おの〜

こがくと〜

屏風を〜

圖書こが〜 九條こほ〜

みこが〜

かゝる事な人

因に記す

^はかゝる同事

は記くてもかゝる事

内侍の修理太史たる事

最中とありて一入の事

六乃事なり

源氏の事

かゝる事は記す

^并中將の事

秘日

多れと志す

源の修理太史の事

多れと志す事

多れと

中將の事

内侍の事

あが事

中將の事

川あひまふほくま衣れわらく
わころいさく

ほくま^{中物}る名やまれそんひさうく

わころふ内中うま海とい

源の西あひ事と何うさく

策源のあひ名れわらく

とあひけよ

策定つてびりうの源れよ

てあひるれ

ふよとりまは

おのこまあえ衣下よ

まはあつらん

わころいさく

まをわらく

策日何やうあえほころく

まはあつらん

是まて内中物の詞

君

延原

源へ

かゝれる此物と志つくるは家とて海に
うすさゝぬとおもひか

此中おぼはるのふらふらとせむらふ
てをすすむと何と云ふとふたつと

誰と云ふれとて人よりけりおもひ
ありとてふまうり 秘目

兼回取君の志やより出んとてさうりか
かよつては源に人てありと何と云ふの

年乃名にけれ此物と知あつたや
よ見あつたやとてふとてふとて

夏衣さうらふに取君乃事わつとて
ちうへー

よやしたまき
友なるよとてふとてふとて

秋さうらふとてふとてふとて
取中ねとあひ具して入り流す
ねとてふとてふとてふとて

たはれそ何こ波と許容しる破と
うむしつれとせ

私いりううぬふ破紙いつてうみ
ぬしといあひんううじふうせせ

そのとれん

せうとゆうくあとうりあーぬひ
しとみきさうり

おいの中おのるうせり

衣衣乃うしよふり帯へ

深田侍のかさうり深の指費よきて
とくわの帯へ

もうぬるをうりいふあうと

衣衣と^{さうし}うりい昔の直衣のえれと帯

小用りい今の世とまよし乃西帯をゆ
いさ衣衣えれと用うふ衣此衣衣の二

藍武のむ田と年よらりてあくと源氏の
宰相中将うすう二藍のえい中おのる
まううとれと官ひさういりてこさ二藍此

衣衣と忌用より官位ありさし宿徳の
 久しかりの官のひさしより久しと用り
 ろひいへ故裏葉の巻より吾れ宰相中將
 のより源氏の事源氏の君れよりとて非糸
 儀のやとまにとなれより人として二あわ
 らされとのより非糸儀より二位三位か
 らの中ねとよりとてに夕音ハ八座に
 昇進し給ふ事あれは花園の衣衣と
 多しよりふん花柳の事より源氏の帯と
 うと二藍より帯のよにまらわられてと
 わりいぬ既中ねのこよ二何升をれは
 り西衣よりいふやうとつたて近代衣
 衣の帯より下龍衣の衣とよりよ禁衣乃
 人冬藕芳 面白堂 裏濃打後 夏藕芳 遠草文 生スレ 四位
 以下非糸儀人冬躰躰 面白堂 裏濃打平絹 夏 三ア 二藍
 穀大し今と衣衣とよりほよの人衣
 衣の多しよりわゆる源氏とさぬ人下か
 らのれ多しよりよへに事よりいふこと

箋

さう人の下切らねと帯に用ひの略義と
そ相ひのゆり

帯の玉衣乃とれと用ひ義此玉衣ゆり
さう人の下切らね此玉衣用ひゆり
と禁ふ文非々の差別さうと色此ゆり
の貴人かと早く宿海よりぬに取君
源氏と年尚しゆれと文とさう
故裏葉し

柳巻ししは支義花の分と略さく

花は源氏といはれゆり宰相中ゆりゆせ
らゆりまこと二位中ゆり 以上箋

くぬ神とたよりまり

源乃玉衣此神のたゆりかこるひまは
ろくくゆりあつしゆり時がころひゆり

たゆり

鱧神と或説さうとハ初と将字と不用と

鱧神と又ノ義将ノ字云

たゆりゆりてみゆり

それよ方をさしつてとて

正心むきめられ給

源の心

中将殿の命より

頭中將禁中宿直乃所へ

ららけをさせ

中將の言よりく申さるる

義 **源**乃を名にらるる

いふてらりはらん

源の心

これ帯とえはるまじく

け帯終くつていと源の心はく

乃人よはらるる

その名に

帯乃名に

^源中女ふかきややをらやうたに花田乃

帯くとりてたにみか

かよふ ^は **源**かきよめやせんといふ

立ち入り

也中物

以君より感えてむるなり

君よわくのひまをくれわが帯あれうて

あゝわが中とくさん

紅

身の中へうねる人のささぐれて終る

うらや

養ひ以君深田侍と我ゆかりて女は吾人

えのさきこそ終り

女の顔これと我ゆかりて理運よひ

もろく

よれくあどに

深田友人あうとあゆ

物に成る

深と中物このうのさあれのふれ

うくゆつそくわくはくはくはくはく

さあてあうとあゆ

あけやけあけあけあけあけあけあけ

中物あけあけあけあけあけあけあけ

さとしげぬるゆき

^細よへ夢中なりとちりひらき

いさよひ

ふもふも目うり

人また

人乃みぬ回

物ぐ

中將のゆき源氏のうら

ゆきを

取巻のゆき

かきりう

^細源乃初

中將の足ありてゆき

と源のゆめにゆきを

されの源の又取巻

ゆきは口

ゆき

ゆき

流しはかたは事うありて深うとむ
心方してまゝあやむ

女いしえんま

源内侍乃源成うみもてしり
まひくははま

中将をいりうどの君

以中納の養上中といひくはしりよん

ねどーらさ

あせん乃村のあらあらぬまゝんい

解んてあさいあくくはみさうら

是よりうさうそめんといふ事て草

み地く

は取成中納の源のちまを解し

ゆり切のあさくこのかゝらる源の

先中よりあさくこのかゝらる源の

よめえん源内侍のちまを解し

解成

ゆりまきこし

養河可成ふ事

この中ね

此中將の何れと云ふ

此もく^秘何れと云ふは此中ねの事

ひめ君の西甲の腹

養白養上と一後乃中ねのみ

りうの^秘おいてみよの^秘いり^秘の^秘腹

みよの御子

是より此中ねの^秘中

源の^秘子^秘此^秘き^秘ら^秘り^秘の^秘事

おねの^秘大^秘臣

拾録の^秘事^秘な^秘く^秘く^秘の^秘事^秘の^秘事

みよ

みよ此^秘内^秘妹^秘の^秘事

おねの^秘事^秘の^秘事

是も中將の^秘事^秘の^秘事

人

是より此中ねの^秘事

大乃西中やまみ

源政乃事人

これとて海をく

あまのりくわく乃事あまのりくわく

ほかに省く

七月こづきよりきくはわりのみ

養花 菟はなれ女御中宮より

河内中十月の悲くもれは皇太后

菟の子昭宣云女 寛平九七月中宮

昌泰二七月為皇太后是木の例と撰

る 秘日

班子女王光孝后 寛平九七亦六

皇太后

九傳曰帝嫡妃曰皇后

後漢書曰以備内職為后正位宮中

周礼曰王者立后又云以陰礼教

六宮鄭玄云陰礼婦人礼也六宮後五

前一又云六宮謂后也婦人稱寢曰宮

隱帝之言一燕寢五也名象王立宮而
居之亦正注禮記之后し言後言在天之
後也故以女謂後達皇后既居後宮之神武天皇
辛酉尊正妃為皇后踰翰五十鈴姬也
令之中宮職謂皇后宮其太皇后皇太后亦曰中宮也釋曰今
稱皇后者為中宮也

源氏乃君宰相トなりぬぬ

^秘乞トなり宰相中將也

^秘稱從天會 天平神護二年正月八日石上中納言兼左衛門

宅嗣任參議元中衛中將宰相中將始之

みトなりぬぬ

相臺以下位ありトなりぬぬ

こトなりぬぬ

冷泉院ト 秘 蘇臺の正殿此若宮之

源氏乃

蘇臺の正殿此親朝皆親トなりぬぬ

源氏乃トなりぬぬ

天もと補依の長は若氏とありて、
しうぶの凡源氏の誼誠天由とあり
まりて後の天子の西子人長とあり時
の必源の姓を流るは白皇子と源氏と
中也親王と長下にくるれく源氏也
くりしる相疊卷よ流し年
より宮 冷泉院 乃西外舅親王の人
長めて西しるもととまき命ありて
源氏執柄石大長能有例也

しう宮殿とあり

秘 故つが中よよ立流るなり

西よりやと杉のとも杉人ありたり

人しかりのさせ流るんれとありも

しうてさきの流れ

あしきせんいし西のしん流るなり

弘徽女の西の西のあしき流るなり

秘 西ののうしきは是の西の流るなり

弘徽女とをさしかりたりなり

とれと喜宮乃師代

朱雀院の御即位方人みまへ

初御一始と先よし

初の内門の弘徽女(まろ)御つとせぬ

けふ喜文乃由くたにえ

これより世の人のおいあつてさゆへ

たふとよはるりおへる

義史 ^{ニヒラヨシ} 大正年とあり くむせとせあ

まうりしとくをた()

圖書 祿名御 ^{ニヒラヨシ} 大正年と音よ

とよ 從 ともとせあたり くねれ

^秘 二十餘年 と音よ 陰 ()

おまらとせあたりと用()

世れんともまらしとあり

まに喜文のともより又草子成れ

まうりしと音よ

^秘 申宮乃西へ

圖書 ありつかま右ありてつとてまへ

乃時

宰相君

源

杉杉 ときわさしきわふ中はと

是より友はかの人とるはと

先友童中文の先帝は女と名腹の

田ふくされは西門はくわ先をんは

そ腹よむの光くやささる冷泉流され

流ひとるは西門の西龍をさるひとる

中せは河の中とあひひとるさる

圖書よさるさるはみさるは冷泉流の

西門

相と東とさるはみさるはと西門

乃中宮のゆにさるはと西門の光の

りやさるはとさるはと西門の光の

まよやさるはとさるはと西門の光の

西門の光の

さるはと

源也

御あしうらと思ひ居られて

伊場物焼二条の店にまゝと書み此書を
とん年々戸もろ付成神は満ちてくる
よこの志はささいなうひくろたはるれ
大層やろ一坪の山とまきやその神家の
しもむらひいつくは
とそんまろ妙りやまひらんいうそ
まじまじと

花

中宮大納言ハ風聲よめさうと事と
そ又底の毛車よまぬ時とあつて法
奉り人り糖と書物よとりてか
るりつと

そらろくーま中と

こひさしつらりこひぬさく

圖書印

源
ほさとせぬんろぬみよろ遊りれ雪井ふ
んをみるにはけそと

秋
らんのをいひしるるあしを舟よりかき置
む
心のやいひしるるあしを舟よりかき置
秋とい初のみよ字ははらとありしむ
雲乃あやふまをれしゆとけしり
うりゆらんのをみかき置しゆとけしり
ゆたにゆらんのをみかき置しゆとけしり
くち舟しるるあしを舟よりかき置
るし初しゆとけしり
よくしゆとけしり

月のなまはしるるあしを舟よりかき置

物いしゆとけしり

源乃西中し

みかき置しゆとけしり

是より着てなまはしるるあしを舟よりかき置

見ゆしゆとけしり

是より着てなまはしるるあしを舟よりかき置

高しゆとけしり

源乃西中し





